逐次通訳における意味論的・語用論的制約

南 津 佳 広

Semantics and pragmatic constraints in consecutive interpreting

MINAMITSU Yoshihiro

Abstract

This paper discusses the underlying ability, which enhances interpreters' note-taking in consecutive interpreting (CI) in terms of the Cooperation Model proposed by Tomasello (2008). In previous studies, the issue of which ability helps consecutive interpreters facilitate note-taking in CI is still open. Through the scrutiny of professional interpreters' consecutive notes, it is clear that the notations are diagonally structured and reflect semantics of the original speech. Based on these notations, interpreters re-express the original speaker's intention with pragmatic heuristics.

Keywords：ノートテーキング、協力モデル、飽和、自由拡張

1．はじめに

人間はなぜ通訳を介して異文化間のコミュニケーションを図ることができるのだろうか。既存の通訳行為に関する研究では、通訳者に求められる固有の技能や、記憶など心理学からのアプローチ、言語哲学を基盤とした発話理解からのアプローチから研究が数多く行われてきた。しかし、コミュニケーション行為の本質から通訳そのものを分析する試みはまだ数が少ない。そこで本論では、コミュニケーション行為を可能にさせる基盤から通訳行為を見直し、何に動機づけられて通訳を介した異文化コミュニケーションを成立させているのかを考察する。

では、人間がコミュニケーション能力を獲得した起源には、どのようなものがあるのだろうか。Tomasello（2008）は、“the shared intentionality infrastructure”（共有志向性の基盤）に由来するCooperation Model（協力モデル）を提唱している。この「協力モデル」に基づくコミュニケーションを成立させる主な要因として、以下の３点を上げている：①伝達を行うために人間は共同の意図を作り、必要に応じて相互調整を行う、②共同注意とその状況の共有理解に基礎を置く、そして③参与者の共有の想定のもとで伝達を行う。言い換えるなら、コミュニケーションを協力的に構造化しているから伝達が成功しうると主張しているのである。

もしこの仮説が正しいのであれば、通訳コミュニケーションにおいても、発話者・通訳者・聞き手の３者間でコミュニケーションが協力的に構造化され、何かしらの共有志向性の基盤が構築されているはずである。そこで、本論では、逐次通訳を例に、発話者・通訳者・聞き手の間にどのような共有志向性の基盤が構築されているのかを検証する。逐次通訳で用いられるコミュニケーション手段は、コード化された発話とノートテーキングに用いられる表記である。異なるコードの慣習、つまり言語体系を超えて伝達を成功できるのは、発話者・通訳者・聞き手の間に共同注意が働き、その状況の共

有理解が行われているはずである。本論では、逐次通訳におけるノートテーキングを分析することによって、共有志向性の一端を可視化することができるとし、人間のコミュニケーションの成立過程の本質の一端を明らかにすることができると仮定して考察を進めていく。

第２節では、逐次通訳の特徴とノートテーキングついて概観し、第３節では、表記構造の共通点について述べ、続く４節では、通訳者がどのように表記をもとに何に動機づけられて訳出しているのかを分析することで、逐次通訳を介したコミュニケーションの共有志向性の一端を考察する。

２．逐次通訳とノートテーキング

逐次通訳とは、通訳方式の一種である。⑴における写真１のように、通訳者は原発言（SL）を聞き、その発話内容をもとにノートテーキングを行い、その表記内容を手掛かりにして訳出を行う。

⑴

写真１　逐次通訳でのノートテーキング

既存の逐次通訳の研究では、通訳者がどのようにノートテーキングで表記すると安定的に訳出できるのかに焦点が当てられてきた。特に、通訳者個人の直感や実務経験から、SL を手がかりに略字・記号を用いて視覚的にわかりやすく表記することが主張されてきた（Rozan　1956, Миньяр-Белоручев 1969, Msytseek 1989, Jilles 2005）。しかし、その表記内容・表記方法に関して、通訳者個人の直感や実務経験を支える能力は何なのかという点に関しては、既存の研究ではほとんど踏み込んでおらず、不明瞭なところが多い。

そこで、本論では、ノートテーキングにおける表記内容・表記方法は何に動機づけられているのか、また、表記を手がかりにどのように訳出しているのかに焦点を当てて考察を行う。そこで、下記の２つのリサーチクエスチョンをたてた。

⑵　Research Questions

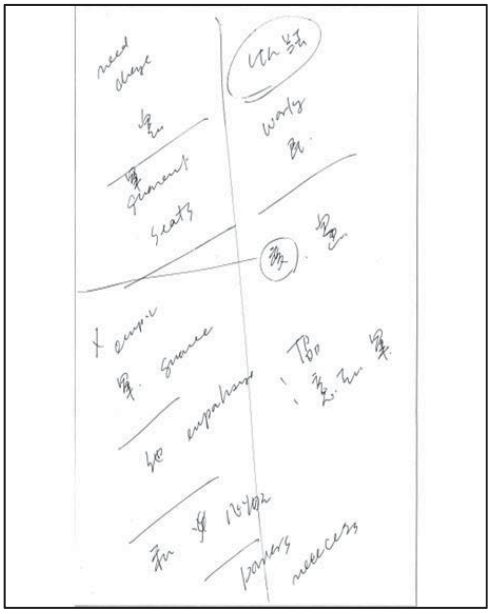
①　ノートテーキングの表記内容・表記方法はどのようになっているのか。

②　表記をもとに訳出する際に、意味論的制約と語用論操作の関係はどのようになっているのか。

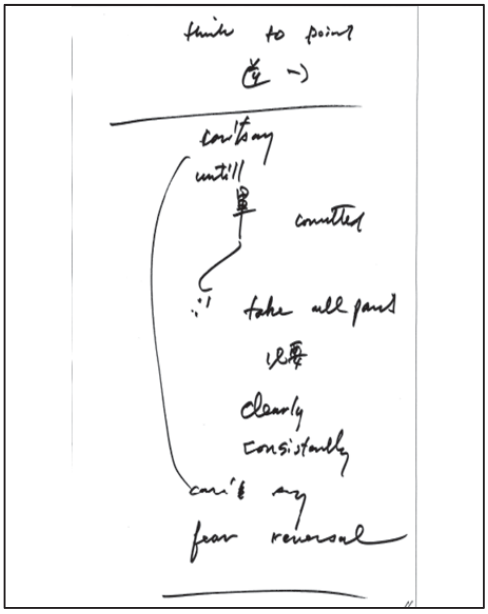
先述したように、逐次通訳においては、通訳者個人の実務経験等の違いから、ノートテーキングにおける表記内容・表記方法にも大きな個人差が見られることが既存の経験で明らかになっている。そこで、以下の例を見ていただきたい。(3)は原発言（SL）、(4)(5)は２名の通訳者による(3)のノート例である。

(3)　[SL]: But whatever we do, whatever changes we bring about with regard to the Constitution, I want to bring these changes about, with the cooperation, and willing cooperation, of the Army.

(4)



(5)



確かに、既存の研究のとおり、表記内容や表記方法には通訳者個人による違いが見られる。だが、ノートテーキングにおける表記方法・表記内容は果たして通訳者の個人差だけで片付けられるのだろうか。むしろ、何か共通点があるのではないだろうか。

本研究では、共通点があるかどうか確かめるために実験を行った（註参照）。

(6)　実験の概要

①　日時：2012年９月

②　協力者：10年以上の実務経験があるプロの通訳者９名

③　実験素材：VOA（Voice of America）放送に出演したアウンサン・スーチー氏へのインタビューの冒頭の３分間を使用

④　方法：ノートテーキング付きの逐次通訳を行ってもらい、録音・録画する。その後、表記内容・表記方法と訳出をもとに内省する。

本論では、この逐次通訳の実験をもとに、SL、ノートテーキングの表記、訳出の比較分析を行う。そして、通訳者がSLを手がかりに、どのように表記し、かつ、その表記を手掛かりにどのように訳出しているかを考察する。この目的は、人間がどのように他者の発話を理解しているのか、また、思

考をもとにどのように発信しているのか、一連のプロセスの一端を明らかにすることにある。

まず、次節では、通訳者がノートテーキングにおいてどのように表記しているのか、内容・方法の観点から分析を進める。

3．ノートテーキングにおける表記

本節では、実際に逐次通訳者がノートテーキングにおいてどのように表記しているのかを、実験から得たデータを元に考察を進める。まずは表記内容から見てみる。

3.1. 表記内容

逐次通訳のノートテーキングでは、通訳者は略語・記号を用いて表記している。では、その略語・記号は、通訳者がSLを聴取して分析・理解を進める上で、どの段階を表記しているのだろうか。

そこで、逐次通訳におけるノートテーキングのプロセスを考えてみよう。通訳者は、SLを聴取してから、すぐにノートテーキングを始める。つまり、逐次通訳は、聴取とメモへの表記を同時並行で行うのである。また、原発言者から原稿を与えられていない場合は、通訳者が当該の通訳テーマに関して事前準備を行っていたとしても、原発言者が何を伝えようとしているのか（伝達意図）を確定させた上でノートテーキングを行うことはきわめて難しい。従って、逐次通訳者はノートテーキングを行う際に、原則的には原発言の特定の対象へ言及しない一般的な概念表示の断片を表記していると想定できる。

前掲の原発言(3)とそのノート例(4)、(5)を見ていただきたい。(4)、(5)とも、原発言の同じ箇所を２名の実験協力者が表記したものである。一見すると、表記方法・表記内容ともに個人差が見られるかもしれない。しかし、精査すると、２つの共通点があることがわかる。

まず、その略語・記号は、通訳者個人の直感や経験則に基づくとはいえ、基本的にSLを構成する単語が表す概念で、特定の対象への言及を含まない意味表示の断片を表記しているものが多い。これは、語彙的・構造的な曖昧性を持たない概念を、通訳者がコード化し、その概念表示の断片を表記したものと言えよう。例えば、(3)で述べられている“the Constitution”や“the Army”は、その指示対象を特定して表記するのではなく、そのスペリングの断片を表記している。つまり、いわゆる当該表現の字義通りの意味、もしくは、辞書的意味表記に相当する日本語を表記していることがわかる。

このことから、先述したとおり、逐次通訳におけるノートテーキングの表記内容は、確かに通訳者個人の直感や経験即に基づく略字や記号が用いられている。しかし、その略字・記号は通訳者が聴取した原発言の一般的な概念表示に動機づけられていることが分かる。通訳者はこの表記内容を元に語用論操作を行い、訳出を行うと言えよう。

では、表記方法の点ではどうだろうか。確かに個人差があるものの、決してアトランダムに表記しているわけではなく、法則性があることを次節にて明らかにする。

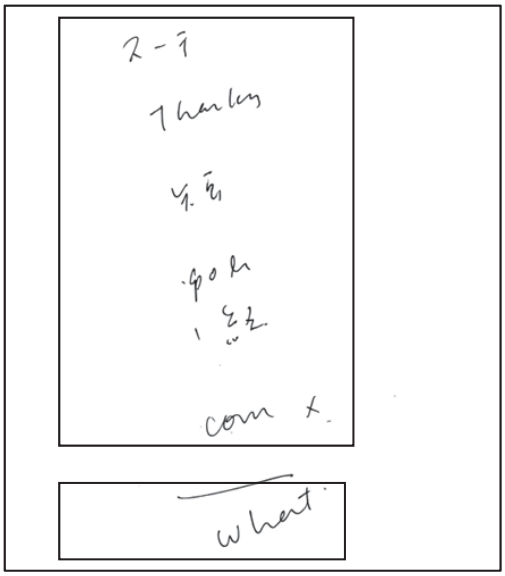
3.2. 表記構造のユニット

通訳者はSLをもとにどのように構造化してノートテーキングにて表記しているのだろうか。前出のアウンサン・スーチー氏の発言から、以下に引用する(7)を例に検討する。

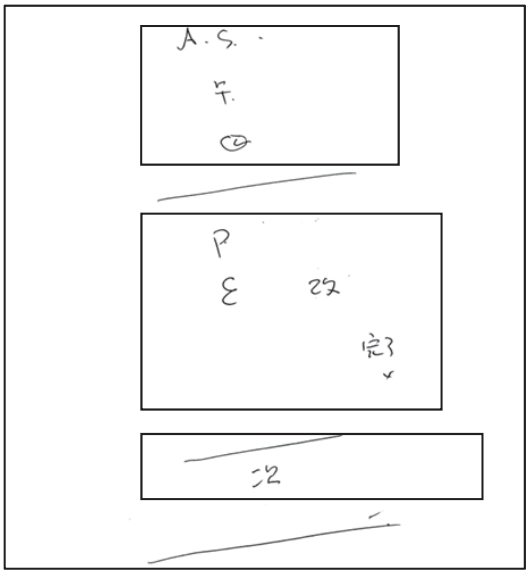
(7) [SL] Daw Aung San Suu Kyi, thank you for being with us this afternoon. Our time is short; we'll get right to the questions. Political and economic reforms in Burma are clearly not yet complete. What needs to happen next?

この発言に対して、実験協力者は(8)から(11)のようにこの発言を構造化して表記している。

(8)

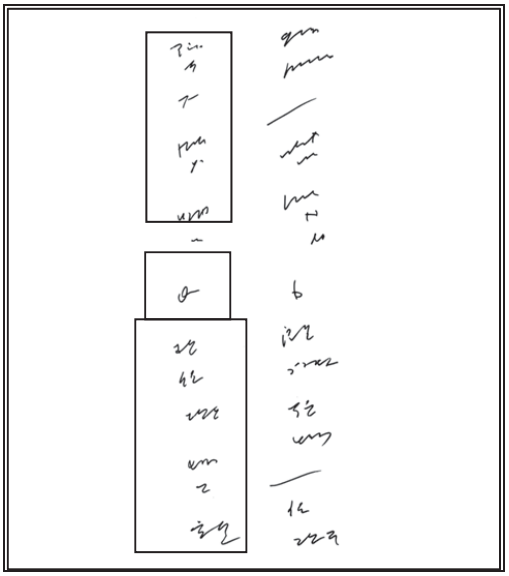


(9)



(10)

(11)



(8)から(11)の表記方法を観察すると、通訳者はSLを手がかりにして、原則的にSL(8)から真偽判断可能な最小命題を作り上げて、いくつかのユニットにまとめて表記していることがわかる。(7)の最小命題は(12)のようになる。

⑿

① Daw Aung San Suu Kyi, thank you for being with us this afternoon.
② Our time (of this interview) is short.
③ We will get right to the questions.
④ Political and economic reforms in Burma are clearly not yet complete.
⑤ What needs to happen next?

そして、⑿の①～⑤の最小命題を積み重ねていることがわかる。どこまで積み重ねてユニット化しているかは、⑻～⒀からわかるように、通訳者個人の判断に委ねられる。逐次通訳プロセスを録画したビデオとともに検証した結果、⑻の場合、⑿の①～④までを積み重ねて２のユニットとしている。⑼と⒁では、⑿の①と②、③と④、⑤と３つのユニットに分けて表記していることがわかった。⒀では、⑿の①、②、③～⑤の３つのユニットに分けて表記していることが分かった。

SL をどのようにユニット化するのかについては、原則的に通訳者が SL を手がかりに最小命題に作り上げ、その最小命題を積み重ねて複数のユニットとして表記していることがわかった。最小命題をどこまで積み重ねるかは、通訳者の実務経験値と通訳者個人の記憶が飽和しないようにバランスをはかった結果と言えよう。

では、そのユニットの中身はどのようになっているのだろうか。⑻～⒀を観察していると、いくつかの共通事項が出てくる。まず、ノート用紙をどのように使うにせよ、⒀の図１のように、ユニット内で表記する際にはインデントを付けて左斜め上から、右斜め下へ表記していると一般化できる。

⒀

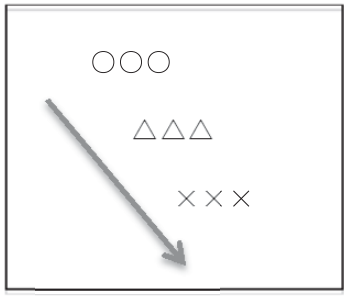


図１．ノートテーキングの表記方法

この表記は、原則的に Rozan（1956）の表記方法に則ったものである。この表記方法のメリットは以下の２点である。まず、表記内容を振り返る際に、視線を動かすことなく一目で構造化して内容把握することができること。次に、SL のあとに素早く訳出することである。

次に、命題のどの項目が表記されているかを見てみよう。⑻から⒀に共通していることは、行為の受け手としての“Aung San Suu Kyi”や、真偽判定可能な最小命題の行為主となる“political”や“economic”、動作を表す“not complete”に相当する略字や記号が表記されていることである。このことから、最小命題を構成する主要素の断片を表記していると言える。

本節では、逐次通訳の実験から得たデータをもとに、逐次通訳者がノートテーキングでどのように表記しているのか、内容と方法の観点から考察した。その結果、表記内容に関しては、基本的に SL

を構成する単語が表す概念で、特定の対象への言及を含まない意味表示の断片を表記しているものが多いことがわかった。さらに、表記方法に関しても、SL から最小命題を作成し、その最小命題を積み重ねてユニット化し、最小命題を構成する主要素を構造化して表記していることが分かった。このことから、逐次通訳におけるノートテーキングは意味論レベルの処理段階であり、その表記内容は最小命題の主要素を構成する概念表示の断片を表記していることがわかった。

Tomasello（2008）の言うとおり、人間がコミュニケーションを成立させるために、その参与者の間で何かしらの共有基盤を構築しているとするのであれば、ノートテーキングの表記を手掛かりに訳出する段階で、必要に応じて相互調整を行っているはずである。そこで、次節では、通訳者が表記内容を手掛かりに、どのように訳出しているのかを分析することで、本当に共有基盤を構築しているのかを検討する。

4．表記内容を元にどのように訳出するのか

前節では、逐次通訳者がどのように原発言を聴取・分析してノートテーキングの際に表記するのかについて考察を進めてきた。表記内容・表記方法に関しては、通訳者は原則的に原発言の言語形式をもとに最小命題を作り、その最小命題を構造化して表記していることがわかった。ここまでは、いわゆる意味論レベルの処理である。

ところが、訳出局面では、ノートテーキングにおける表記内容とは異なる訳出をしている箇所が散見された。これは、通訳者が表記内容を手がかりに語用論操作を行い、認知語用論の枠組みで言う「表意」を作り出して、聞き手にあわせて訳出していると考えられる。

ここでいう表意とは、当該の発話の言語使用状況の中で作り出されたその発話の意味である。この表意を生み出すにあたっては、言語形式から得られた意味概念を元に推論操作を行い、その状況で関連がある――つまり、聞き手にとって妥当であると認められた解釈が得られた段階で操作をやめる。この推論操作には、①曖昧性除去（指示付与）、②アドホック概念構築、③飽和、④自由拡張の４種類の操作が行われる。聞き手にあわせて訳出を行うことを考えれば、①の曖昧性除去と②アドホック概念構築は、通訳行為では自明のことと言えよう。問題は③の飽和化と④の自由拡張である。

そこで、本節では、③の飽和化と④の自由拡張に焦点をあて、通訳者がどのように操作を行い訳出しているのかを考察する。

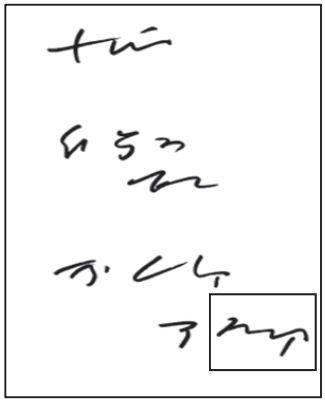
4.1. 飽和

飽和とは、語彙概念の制約を受けて、当該表現のそのスロットに文脈情報補い、表意を構築するプロセスである。そこで、⒁を見ていただきたい。

⒁ [SL] I think it's time we tried to stand on our own and I've been very grateful to the United States for <u>what they've done</u> to help the forces of democracy.

これに対するノートテーキングは⒃の通りである。

⑮



この表記内容を手がかりに、逐次通訳者は⑯のように訳出している。

⑯ ［TL］もうそろそろビルマが自分の足でしっかりと立てるようにするべきだと思います。アメリカには大変感謝しております。民主化プロセスを進める上で、制裁は役に立ったと考えております。

ここでアウンサン・スーチーは、“I think it‘s time we tried to stand on our own and I’ve been very grateful to the United States for what they‘ve done to help the forces of democracy.”と述べている。問題は、“what they’ve done”の箇所である。その発言を受けて、通訳者は⑯の四角で囲った箇所のように表記している。この“what they’ve done”は⑱のように語彙概念にスロットがある。

⑰ what they$_x$ have done$_y$

通訳者はコンテクストを手掛かりに、スロット“x”に相当する“they”に対しては「アメリカ」を挿入してスロットを満たしている。次に、スロット“y”には、2003年にアメリカが対ミャンマー制裁法を制定したことを当該の通訳者は知識として獲得していたのであろう。そこで、対ミャンマーの経済制裁を充てたと考えられる。その上で、“what they’ve done”をまとめて「制裁」と訳している。

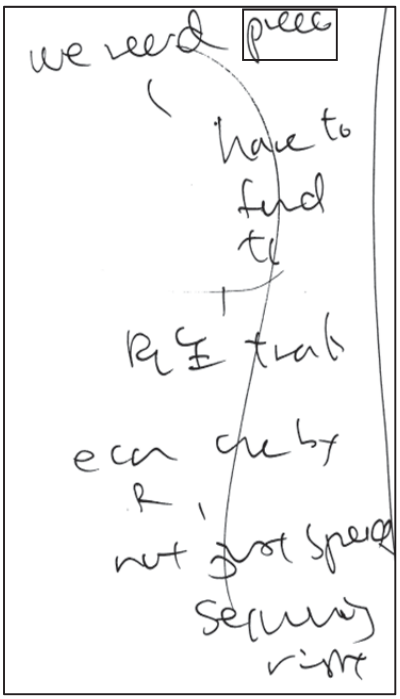
4. 2. 自由拡張

次に、自由拡張について述べる。飽和とは異なり、自由拡張は純粋な語用論操作であり、語彙概念の制約を受けることなく、聞き手自身が文脈概念から情報を付け足すことによって表意を構築する作業である。原発言⑱を見ていただきたい。

⑱ [SL] We need to just go on with the process. We need to find out what we have to do in order to keep the democratization process on track.

この⑱に対して、通訳者は⑲のようにノートで表記している。

⑲



この表記を手がかりに、逐次通訳者は⑳のように訳出している。

⑳　［TL］このプロセス…現在のプロセスを続ける必要があります。何をすべきか、模索する必要があります。で、民主化の動きを軌道に乗せるということです。

原発言では、司会者が“Political and economic reforms in Burma are clearly not yet complete. What needs to happen next?”と聞いている。それに対して、アウンサン・スーチーは“We need to just go on with the process. We need to find out what we have to do in order to keep the democratization process on track.”と答えている。問題は、アウンサン・スーチーがいきなり述べた“the process”である。アウンサン・スーチーは、この表現の指示対象をあらかじめ想定していたのだろう。しかし、通訳者は、文脈情報のみを手掛かりにして、その指示対象を同定しなくてはならない。だが、事前に該当する文脈情報が与えられていない。この語彙概念は、冒頭から出ていることを考えるのであれば、“the　process”の語彙概念のスロットに何を埋めるべきかこの時点では曖昧である。また、上述したように通訳者に文脈情報は何も提供されていない。したがって、通訳者自身は⑳の通り、「このプロセス…現在のプロセス」と、「この」や「現在の」を付け足し、“process”が持つ特定の対象への言及を含まない意味表示を膨らませることで、解釈を聞き手に委ねて訳出している。

このように、訳出局面で逐次通訳者はSLの語彙概念の制約と表記をもとに、飽和という語用論的操作を行って訳出していることが明らかとなった。

4.3.　どこまで自由拡張は認められるのか

通訳者の役割は、原発言者の言わんとすることをすべて、またそれのみを訳出言語で述べることにあることは周知の通りである。ところが、ある文化にもとづく言語体系の中で生み出される発話の意図を、異なる文化にもとづく言語体系へそのまま訳すことは不可能である。そのため、通訳者は原発

言の表意を構築するために語用論操作を駆使して通訳せざるを得ない。

表意を構築するプロセスとして、上述した４つの語用論操作のうち、曖昧性除去、アドホック概念構築、飽和化は語彙概念に動機づけられて行うため、さほどずれを生むことなく安定的に訳出できることが分かった。ところが、自由拡張は、文脈に動機づけられる語用論操作のため、どこまで生成しうるのかが問題となる。そこで、本節では自由拡張における過剰生成の制約について検討する。

自由拡張は、上述した通り、純粋に文脈によって動機づけられたものであり、どこまでも生成することもできる考え方もある。ところが、通訳コミュニケーションの場合、通訳者の判断次第で、文脈を手がかりに任意に付け足してしまうとどうなるのだろうか。先述したSL⒅および、その訳出⒇を再び考えてみよう。

（21［＝18］）[SL] We need to just go on with the process. We need to find out what we have to do in order to keep the democratization process on track.

（22［＝20］）［TL］このプロセス…現在のプロセスを続ける必要があります。何をすべきか、模索する必要があります。で、民主化の動きを軌道に乗せるということです。

ミャンマーが現在置かれている背景知識を用いるなら、“the process”を㉓のように、情報を過剰に付加して訳を生成することが可能かもしれない。

㉓　ミャンマーの軍政から民主化に伴う法の支配という国民の意識改革、外国資本投資による経済の活性化といった一連の改革のプロセス

峯島（2013）は、自由拡張に対する意味論的な制約を主張し、対象志向的な概念に新たな要素を付加することを認めている。しかし、結果的には語彙概念を狭めなくてはならず、属性概念に新たな要素を付加することはできないと述べている。もしそれが正しいのであれば、㉓は峰島のいう対象志向へ新たな要素を付加していることになり、“process”が内包する語彙概念を絞り込むことになっているので、自由拡張として成立しているとも考えられる。しかし、通訳コミュニケーション活動を鑑みた場合、㉓のような訳出は実際の逐次通訳の現場では実現不可能ではないだろうか。既存の研究では、その理由を通訳者の役割である、「原発言者の言わんとすることをそのまま訳出言語で述べる」ことで片付けてきた。ところが、その説明だけでは不十分である。

逐次通訳の現場では、通訳者自身が事前準備から得た背景知識だけではなく、通訳現場の参与者間の関係、原発言者が当該発言にかけた時間と通訳者が訳出にかける時間の関係といった、通訳を行う状況で生み出される協力関係のもとで、コミュニケーションを成功させている。㉒の訳出が成立しうるのは、原発言者・通訳者・聞き手の３者間で、英語や日本語の各々の言語体系内での慣習をその言語体系に属する者同士が、各言語の慣習をともに同じ方法で使っていることを共有しているからである。㉒の場合、通訳現場の参与者の間の共通基盤が成立しているとした上で、後に詳述するトピックの機能を果たすように志向性を維持した「この」や「現在の」を付加して訳出しており、㉓のように“the process”の語彙概念のスロットを完全に埋めて訳してしまうと、訳出に時間がかかり、逐次通訳の現場に置ける協力関係が崩れてしまう。

このように、通訳コミュニケーションでは、共有志向性が構築されていることを忘れてはならない。そのため、通訳者独自の判断で、背景知識を含めた文脈を手がかりに、訳出を過剰生成したとしても、原発言者と通訳者、聞き手が協力関係を構築できなければ通訳コミュニケーションは失敗してしまうことになる。通訳コミュニケーションにおける自由拡張の制約は、意味論的な制約だけではなく、コミュニケーションの参与者間の共有志向性も制約を課しているのではないだろうか。

本節では、通訳者がノートテーキングをてがかりにしてどのような語用論操作を行い、訳出しているのかを検証した。本節にて考察した飽和と自由拡張の現象に関しては、前者は語彙概念、後者は文脈に動機づけられて推論操作が行われていることがわかった。また、自由拡張の過剰生成に対しては、意味論的な制約だけではなく、コミュニケーション参与者間の共有志向性も、拡張に歯止めをかけていることを主張した。

5．まとめ

本稿では、ノートテーキングを用いる逐次通がどのように成立しうるのかを、Tomasello（2008）のいう「協力モデル」の枠組みから、言語学的に考察を行った。これまで通訳者個人の直感と実務経験から得られた略字や記号を用いると述べられてきたノートテーキングの表記内容・表記方法は、通訳者が聴取した原発言の一般的な概念表示に動機づけられた意味論レベルの処理段階であり、その表記内容は最小命題の主要素を構成する概念表示の断片を構造化して表記していることがわかった。

また、訳出局面では、ノートテーキングの表記をもとに通訳者が語用論操作を行って訳出していることが分かった。この語用論的操作を可能にさせるのは、協力モデルでいうコミュニケーション参与者間の共有志向性が大きな役割を果たしていることを主張した。逐次通訳の研究は、これまで通訳教育に関するものが多かったが、逐次通訳を可能にさせる原理に焦点を当てることで、逐次通訳の研究に新たな光を当てることが可能となり、逐次通訳研究の裾野を広げることができる。

また、ノートテーキングを用いた逐次通訳研究は、人間の言語理解だけではなく発話の産出局面にも応用可能である。なぜなら、これまで意味論や語用論で記述されてきた、人間が聴取・理解した概念表示をノートテーキングの表記によって可視化することできるからである。ただし、そこには今後考察すべき問題が豊富にあり、さらなるデータ収集のもと検証を進めなくてはならない。

註：

本実験は、科学研究費助成（研究課題番号24720197）の助成金を得て行われた。本実験に協力戴いた関係各氏に感謝申し上げる。
なお、本実験で用いた素材は、下記の URL で参照可能である。
http://www.voanews.com/content/voa-scott-stearns-interview-with-aung-san-suu-kyi/1510542.html

参考文献

Albl-Mikasa, M. (2008) “(Non-) Sense in Note-taking for conesecutive interpreting” in *Interpreting 10-2*, Jhohn Benjamins Publishing, pp.197-231.

Carston, R (2002) *Thoughts and Utterances: The pragmatics of Explicit Communication*, Blackwell.

Msytseek, H (1989) *Handbuch der Notizentechnik fur Dolmescher: Eim Werg zur sprachnabhangigen Notation*, Heidelberg: Julius Gross.

Миньяр-Белоручев Р.К. (1969) *Учебное пособие по устному переводу*. Mockba.

峯島宏次（2013）「自由拡張をどのように制約するか」西山祐司（編）『名詞句の世界』東京：ひつじ書房、pp513-557。

Nishijima, Y & K. Mineshima (2010) "Free enrichment and over-generation problem" in E. Walazewska, M. Kisielewska-Krysiuk and A. Piskorska (eds.), *In the Minds and Across Minds: A Relevance-Theoretic Perspective on Communication and Translation*, Cambridge Scholars publishing, pp.22-42.

Rozan, J-E (1956) *La prise de notes en interpretation consecutive*. Geneva: Georg.

Tomasello, M (2008) *Origins of Human Communication*. Cambridge: MIT Press.